

近世加賀藩領における柿

安藤 竜※

要旨

加賀藩領の山間部の村落において、柿の栽培と活用の具体的な様子が見られるようになるのは、加賀藩前田家 5 代前田綱紀の代となった元禄期のことである。この時期には、加越能 3 ヶ国における山間部の村落で、串柿などの渋柿の加工品が特産品として生産された。享保期には柿の栽培地域が拡大したほか、渋柿だけでなく甘柿の栽培が盛んになり、加賀国石川郡七原村の七原柿のようなブランド甘柿も誕生した。安永期に至ると、越中国砺波郡福光村のように、渋柿を自村だけでなく広く他村から仕入れ、加工を行う村落もあらわれるようになる。結果、干し柿の生産量は大きく増加することとなった。

加賀藩領内で栽培されていた柿の品種は、全国的なものから地域独自のものまで多様であったが、領域全体では全国的な品種が主に栽培された。藩領独自の品種で広く栽培されていたのは、たかたろう柿や知気寺柿である。また独自の品種には村落名や人名、寺院名を冠した品種が多く、とくに加賀国石川郡で多くの村落名を冠した独自品種が栽培されていた。

※ あんどう りょう

かなざわ食マネジメント専門職大学フードサービスマネジメント学部・助教。

はじめに

本稿の目的は、日本近世の加賀藩領における柿の栽培と活用を明らかにすることである。柿の活用については、果実のほかに葉や材木、柿渋としてのものもあるが、ここでは果実についてのみ取り扱うこととする。

今井敬潤氏⁽¹⁾によれば、柿の原産地は中国の中南部とされ、中国や朝鮮半島で古くから栽培されてきた。日本には奈良時代前後に大陸から伝わったと考えられている。柿には甘柿と渋柿があるが、もともとは渋柿のみであり、のちに甘柿が誕生した。甘柿は中国原産のごく一部の品種を除くと、ほぼ日本で生まれ発達した。

甘柿と渋柿には、それぞれ大きく2種類ある。甘柿では種子が出来ると果肉にタンニンが凝固して出来た黒褐色の斑点（ゴマ）が生じて渋味が抜ける「不完全甘柿」、種子が出来、出来ないに関わらず渋味が抜ける「完全甘柿」がある。渋柿も同様に、種子ができるとゴマが生じて部分的に渋が抜けるが、全体的には渋い「不完全渋柿」、種子の有無に関わらず渋い「完全渋柿」がある。

渋柿の渋味を抜くための方法は、大きく「干し柿」と「さわし柿」に分けられる。「干し柿」は、干す方法によって「吊し柿（釣柿）」と「串柿」に、乾燥の程度で「ころ柿」と「あんぽ柿」にわけられる。「吊るし柿」は紐で吊るし、「串柿」は竹などの串に刺したものである。「ころ柿」は乾燥が進んだ状態で水分が25～30%、「あんぽ柿」は半乾きの状態で水分50%前後のものをいう。また「ころ柿」は、果実の表面に白粉を吹かせることから、白柿とも呼ばれる。

「さわし柿」は、渋柿を干さずに生の果実の状態で渋抜きしたものをさす。遅くまで樹になったまま放置する方法や、収穫後に箱などへ安置して「熟柿」にするものと、短期間でさわす方法に分けられる。「熟柿」は火であぶったかのように赤いために、近世に入ると「烘柿」と呼ばれるようになった。短期間でさわす方法では、温湯で脱渋する方法がもっとも古く、安永年間ごろにはアルコールによる方法が生まれた。また「焼柿」や塩漬にする「漬柿」などの方法もある。

現在、加賀藩の領域であった石川県内では、「ころ柿」で有名な志賀町の最勝柿や、かほく市や宝達清水町の紋平柿、白山市の仏師ヶ野柿、富山県では「富山干し柿」に使用される南砺市福光原産の三社柿などの特産柿が存在する。これらの特産柿の品種は、志賀町の最勝柿⁽²⁾や白山市の仏師ヶ野柿⁽³⁾のように近代以降に栽培されるようになったものと、紋平柿⁽⁴⁾、三社柿⁽⁵⁾など近世から品種が存在したといわれるものもある。また特産柿ではなくても、近世においては山間部の村落を中心に、多様な品種の柿が植えられ、広く利用されていた。

近世における全国的な特産柿には、尾張藩の蜂屋柿⁽⁶⁾や飯田藩などの立石柿（現在の市田柿）⁽⁷⁾などがある。とくに蜂屋柿は将軍家にも献上されており、特産品献上の視点からの研究が進んでいる。加賀藩では必ずしも将軍家への献上品となったわけではないが、

山間部の村落における余業として柿の生産は広く行われ、献上品になりうる特産品の調査でも多く名前が出てくる。そのなかでも福光の三社柿については、千葉茂氏⁽⁸⁾、小竹礪氏⁽⁹⁾による研究や、『福光町史』⁽¹⁰⁾が詳しいが、加賀藩領全体を見通して検討した研究は存在しない。

本稿では、加賀藩領の主に山間部の村落において貴重な特産品だった柿の栽培と活用 of 具体相を明らかにするとともに、加賀藩領で栽培された柿の品種についても検討を加えたい。

1 加賀藩領における柿栽培と活用

1-1 加賀藩前田家3代前田利常と柿

近世初期の加賀藩領における柿の生産については、慶長年間ごろに美濃国から越中国砺波郡福光に、つるし柿の製法が伝えられたとの説がある。しかし、確たる文献があるわけではなく、疑わしいとされている⁽¹¹⁾。そのため、現状ほとんど何もわからない状況といえて良いが、加賀藩前田家3代前田利常が柿を好んだことは広く知られており、金沢や小松において若干の様子が伺える。

『金澤古蹟志』の「柿木畠來歴」⁽¹²⁾の項目には、「浅野茂枝曰く、利常卿は都て菓物を甚だ數寄好ませ給ふにより、菓物を指上げゝるに依つて賜へる御書、或は御印をなし下し給へる献上目録共、舊家に多く特ち傳へたり。其の御書等を見るに柿の御書、いと多し。柿の實を殊にすかせられし事知らせけりと」とあるように、前田利常は柿を非常に好んだといわれる。また同史料には、現在は金沢市の繁華街となっている柿木畠の由来として、元和2年(1616)に犀川崖上の野に、柿木畑・栗林・葡萄畑・莓畑がつくられたことや、その柿木畑で採れた大和柿が、会所から藩士にあてて下げ渡されたことが紹介されているが、万治元年(1658)に利常が死去してからは、畑地から藩士の邸地となったとされる⁽¹³⁾。

また前田利常は小松城に隠居してから、美濃国から蜂屋柿を取り寄せて小松城内の葭島の庭に植えさせている。そして美濃から呼び寄せた者に、吊るし柿をつくらせていた。ある時、吊るし柿を作る際に、むいた皮を捨てていることを知った利常は、食物を無駄にすることを叱り、柿の皮を干して粉にし、米を炒った粉と混ぜて「柿つき」という団子にするように命じたというエピソードが残っている⁽¹⁴⁾。

1-2 延宝～享保期の柿栽培と活用

山間部の村落の特産品として柿が史料上に現れるのは、加賀藩前田家5代前田綱紀の代となった延宝6年(1678)のことである。加賀国石川郡の「珍敷物」を、十村が郡奉行に報告した史料⁽¹⁵⁾には、石川郡知気寺村の包渋柿と吉岡村の串柿が記載されている。

加賀藩領全域では、元禄 4～7 年（1691～1694）に加賀藩が領内の特産品について調査した史料から、柿が栽培されている事例を見出すことができる。元禄期の加賀藩領で、柿の栽培を行っている村落を表 1 に示した。表 1 からは、加賀国では石川郡の吉岡村、越中国では砺波郡の西勝寺村と射水郡の上余川村、能登国では鳳至郡の西山村と五十里村の 5 村が柿栽培を行っていたことが判明する。そして 5 村のうち 4 村が串柿に加工していた。砺波郡西勝寺村の串柿は価格も記載されており、1 連で 1 匁 3 分ほどの値段となっていた（16）。また射水郡上余川村の「あわせ柿」とは、さわし柿のことである（17）。

表 1 元禄期に柿を栽培していた村落

国	郡	十村組	村	種類
加賀	石川郡	福留村間兵衛与下	吉岡村	串柿
越中	砺波郡	苗嶋村次郎左衛門与下	西勝寺村	串柿
	射水郡	加納村兵左衛門組下	上余川村	あわせ柿
能登	鳳至郡	栗蔵村彦三郎組	西山村	串柿
	鳳至郡	宇出（津）村源五組	五十里村	串柿

出典、「耕農之外所作在之村々寄帳」（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵加越能文庫

16. 70-1。『日本農書全集 5』（農山漁村文化協会、1978 年）所収。

鳳至郡西山村の串柿については、『鳳至郡誌』（18）に大正期の事例について記載がある。『鳳至郡誌』によると、串柿の名称を西山柿といい、南志見村字西山のほか、東山、東印内、西院内、町野村字金蔵などで製造された。また使用された品種は、霜長良・早長良という 2 種の渋柿であった。近世期の史料で、これらの村々における柿栽培の史料は未だ見出せないが、同郡寺山村の肝煎である長左衛門が元禄 9 年（1696）2 月に十村彦三郎宛で提出した書上に、「一、串かき 十月時分仕候、右同断」（19）とある。「右同断」の部分は「少シ御座候」であり、それゆえに表 1 の史料には記載されなかったのであろう。表 1 に記載された村落周辺では、特産品とまではいかずとも自家消費段階で柿を栽培・加工していた村落は多くあったと思われる。

さらに正徳元年（1711）10 月、加賀藩は種なし柿の調査を行ったようで、能登国羽咋郡・鳳至郡の状況が判明する。その内容を表 2 に示した。

羽咋郡から見ていくと、深江村については品種も加工法も不明であるが、笹波村の 2 本は、高たろ柿という品種であることが判明する。これは渋柿で、串柿に加工されていた。鳳至郡の種なし柿は羽咋郡の 3 本に比して 13 本と多く、品種は不明であるが串柿・熟柿として加工されていたことがわかる。鳳至郡の柿の木について、十村の馬場村八左衛門が郡奉行 2 名に報告した史料には、「往古より種なし柿与相極り不申も不存候へ共、常々種なし柿と申ならし候。（中略）渋柿に而御座候に付、秋末より串柿に仕、少宛賣出申候に

表 2 正徳元年、能登国の種なし柿

郡	村	名前	本数	甘・渋	加工法	品種
羽咋郡	深江村	吉左衛門	1	不明	不明	不明
	笹波村	新右衛門	1	渋柿	串柿	高たろ柿
	笹波村	忠右衛門	1	渋柿	串柿	高たろ柿
鳳至郡	瀧町村		3	渋柿	串柿、熟柿	不明
	馬渡村		5	渋柿	串柿、熟柿	不明
	久川村		2	渋柿	串柿、熟柿	不明
	飯川谷村		1	渋柿	串柿、熟柿	不明
	馬場村		2	渋柿	串柿、熟柿	不明

出典、『金沢古蹟志(中)』13・14 ページ。

付上之申候」(20)とあり、古くから必ず種なし柿となるわけではないことも知らなかったが、常々「種なし柿」と呼称してきた。渋柿なので、秋の末から串柿に加工し、少しずつ売り出していると記載されている。前述のように、能登国鳳至郡では元禄期から南志見川流域の西山村・五十里村周辺で串柿がつくられていたが、外浦においても串柿がつくられており、少量ではあるが商品として売りだされていたことがわかる。

さて享保7年(1722)に至ると、江戸幕府は幕府への礼物の減額や、産物献上の疎略化・形骸化の阻止を狙った法令を全国に出す。その結果、領内産物だけで献上を行い、江戸などでの献上品の購入が禁じられることとなった(21)。それにともない加賀藩は、同年7・8月に領内で献上品に使用可能な特産品の調査を行った。この調査では、加賀国石川郡で、知気寺村の通(包の誤記か)渋柿と吉岡村の串柿、越中国砺波郡では、西勝寺村の串柿が藩に報告されている(22)。西勝寺村の串柿については、「串柿ふとき廻り五寸長サ壱寸六・七歩位出来仕候、年ニ方柿大小之品ニ而甲乙御座候、壱串二十ヲ宛さし候而、十串あみ壱連与申候、十連式拾連程ハ出来可仕と奉存候、多ハ出来不仕候」(23)とある。西勝寺村の串柿は、年により大小はあるものの、周囲が5寸、長さは1寸6・7歩ほどの大きさであった。また串柿の生産量は、10～20連ほどであったと記されている。この点について『福光町史』は、献上品として使用できる品質のものの生産量であり、村全体の生産量とは別であろうと推測している(24)。筆者も自家消費としての生産量を省いた、献上品としての使用に耐えうる販売用串柿の生産量を指しているのではないかと考える。

また加賀藩御台所奉行の青木新八郎・高山藤右衛門(25)が、おそらく同時期に御進物御用に使用しうる特産品を書き上げた史料があり、大和柿、知気寺柿、串柿についての記載がある。柿に関する箇条のみを史料1に示した。

【史料 1】 (26)

一、大和柿

石川郡七原村に出来仕候。柿之大きさは常躰に御座候。先年八百屋共買請、御用之時分上之候處、出所御尋に御座候。其より六・七年程も上り申候。其節より七原柿と申ならし候。尤當年之柿は賣拂申由に御座候。

付札、七原より出申大和柿之儀相尋候處、風味宜、貯置申にこたえも宜しく御座候。

一、知氣寺柿

石川郡知氣寺村に澁柿出来仕候を、包置熟柿に仕候處、當年は賣拂申由に御座候。

一、串 柿

石川郡吉岡村・福岡村・吉野村、並能美郡上吉谷村・下吉谷村に而出来仕由に御座候。

一、西勝寺串柿

越中西勝寺村に少々出来、賣出し申由に御座候。

2・4 条目の知氣寺柿と西勝柿の記載内容は、前述した内容から大きな変化がないため、1・3 条目のみ解釈を行なう。

まず 1 条目の大和柿であるが、石川郡の七原村で栽培されている。柿の大きさは平均的である。先年に八百屋たちが買いうけ、(金沢城の) 御用の時期に上納したところ、(藩主が) 出所をお尋ねになった。以降 6・7 年ほど上納されている。また、その時から七原柿と申すようになった。もっとも本年の柿は売り払ってしまったとのことである、という内容である。

ここから、石川郡七原村で生産された大和柿が、八百屋たちによって藩の御用の品として上納されたこと、それが藩主の目にとまり、数年のあいだ上納されるようになったことで、村落名を冠した七原柿というブランド名が生まれていたことがわかる。

串柿について述べた 3 条目からは、石川郡の吉岡村だけでなく、周辺の福岡村・吉野村、能美郡の上吉谷村・下吉谷村まで広く柿の栽培地域が広がっていたことが判明する。

享保期に至ると、元禄期に比較して石川郡や能美郡での柿栽培地域は拡大し、さらに七原柿などの村名を冠したブランド柿も生まれるようになった。これ以降、加賀藩領内での柿栽培は、さらに広がりを見せることになる。

1-3 安永期以降の柿栽培と活用

安永期以降の柿栽培については、能登国口郡(羽咋・鹿島)と、加賀国河北郡、越中国砺波郡・射水郡の 3 地域の事例を確認していきたい。

まずは安永 7 年(1778)の能登国口郡(羽咋・鹿島)の産物帳から、柿栽培について記載した箇所を史料 2 に示す。

【史料 2】⁽²⁷⁾

一、渋柿出来高大図り千弍百荷斗

但、山方之内、所ニより出来仕、浦方等江賣出シ申候

右、賣出シ代銀大図り弍貫目斗、但壺荷ニ付錢百四五十文位

一、同通用高大図り千荷斗

右、買入代銀大図り壺貫七百目斗 但右同直段

内容は、(口郡の) 渋柿の出来高は 1,200 荷ほどである。山方のうち複数の村で栽培しており、浦方などへ売り出している。この売り出しの代銀は 2 貫目ほど、1 荷につき錢 140~150 文くらいである。同じく通用高は 1,000 荷ほどで、この買入れ代銀は 1 貫 700 目ほど、1 荷は同値段である、というものである。能登国口郡(羽咋・鹿島)では、渋柿が山方の複数の村で栽培されており、その販売先は浦方の村であったことがわかる。

また加賀国河北郡の柿栽培については、文化 8 年(1811)の事例を表 3 に示した。赤柿というのは山城・大和両国の接する地方と三重県を主産地とする蓮代寺柿系に属する甘柿のことをいうが⁽²⁸⁾、ここでは細かな品種ではなく単純に甘柿のことを指しているだけではないかと考える。また表 3 からは、串柿は束、渋柿は俵、甘柿は個単位で販売がなされていたことがわかる。ほか串柿まで加工する村、渋柿のみ生産する村、甘柿のみ生産する村が、それぞれにある程度まとまっていたことも見てとれる。串柿は刈安村、渋柿は材木村、赤柿は南千谷村の数字が突出しており、これらの村を中心にして栽培や加工が行われていたのであろう。

最後に越中国砺波郡・射水郡の柿栽培についてであるが、『福光町史』⁽²⁹⁾によると、文化 8 年(1811)10 月には、砺波郡の福光村・福光新村で、吊るし柿が生産されていたことが判明する。福光村の同年の出来高は 7 万個ほど、福光新村は 5 千個ほどであった。両村ともに自村の柿だけでなく、広く近在の村々から生柿を買い入れ、吊るし柿を生産していた。福光村には干柿問屋⁽³⁰⁾があり、問屋を通じて集荷が行われ、金沢や高岡へ販売されていた。文政 3 年(1820)には、干し柿の生産者が口銭の支払いを嫌い、生産高を虚偽報告していることを取り締まる触れが出されている。干し柿の生産量も増加し、天保年間(1830~1843)には 500 万個にも達した。また幕末の安政 5 年(1858)には、福光産麻布が近江国に出荷されていたことによるものか、枝柿 1,200 個が「江州行」となるなど、加賀藩領外にも販路が広がっていた。

ほか文政 5 年(1822)4 月に、各郡で特産品の書上が作成されており、砺波郡・射水郡で、どのような品種の柿が栽培されていたのかが判明する。その内容を表 4 に示した。表 4 からは、福光村とその周辺では、わせ柿、大和柿という品種が栽培されていたほか、美濃つるし柿、つるし柿、櫛(串)柿といった干し柿が加工されていたことが判明する。しかし、どのような品種の柿が、つるし柿や櫛(串)柿に加工されていたのかについては不明である。

近世加賀藩領における柿

表 3 文化 8 年、加賀国河北郡で柿を栽培していた村落

村名	串柿 (束)	渋柿 (俵)	赤柿 (個)	村名	串柿 (束)	渋柿 (俵)	赤柿 (個)
倉見村		80		中村		25	
岩崎村	13			北横根村		30	
田屋村	30			南横根村		30	
七黒村	4		10,000	常德村		50	
鳥越村	12			相窪村		40	
北村	25			朝日畑村		18	
蓮花寺村	15	15		大坪村		40	
宮田村	50	12		別所村		20	
鳥屋尾村	20	20		下藤又村		15	
籠月村	17			仮生村		20	
彦太郎畠村	35			材木村		110	
笠池ヶ原村	8			琴坂村			6,000
蒔谷村	30	10		北千石村			13,000
大畠村	10			琴村			12,000
原村	30			上平村			18,000
刈安村	100	16	5,000	瀧下松根村			20,000
越中坂村	30	10		中尾村			18,000
坂戸村	25			南千谷村			40,000
上野村	40	15		今泉村			5,000
河内村	40	8	5,000	松根村			5,000
九折村	10			合計	544	594	157,000
上藤又村		10					

出典、「村々産物相調理書上申帳」（『津幡町史』石川県津幡町役場、1974 年、737～753 ページ）。

註、価格は若干の例外はあるが、1 束で 3～4 匁、1 俵で 130～180 文、数百個で 40～60 文が基本であった。

また福光村周辺以外では、たねなし柿が柴野村で栽培されていたほか、さわし柿が頭川村でつくられるようになっていたことがわかる。また表 4 からは、自家消費段階のものと思われる品種として、市兵衛柿、円座柿、御所光琳柿、角市兵衛柿、光琳柿、日本山柿、信濃柿、猿渡り柿などがあったことが見てとれるが、加賀藩領における柿の品種については次章で検討することにする。ほか加工した柿としては、包ミ柿や阿ふり柿があった。また射水郡では、さわせ柿と渋柿が、八代組の山方の 9 ヶ村で生産され、氷見町などへ売り出していることが判明する。

安永期以降の特徴としては、加賀国河北郡や越中国砺波郡のように、ひとつの村落内のみで柿の栽培と加工を完結させることなく、広く近隣の村落から渋柿を仕入れて、加工を行う村落が増加したことがあげられる。そのなかでも砺波郡福光村は、とくに規模の大きいものであった。

近世加賀藩領における柿

表 4 文政 5 年、越中国砺波郡・射水郡で栽培されていた柿の品種

砺波郡		射水郡	
わせ柿	福光村辺村々ニ少々御座候	さわせ柿 渋柿	八代組山方村々之内、九ヶ村ニ出来仕候、但、年ニ寄増減有之、氷見町等へ賣出申候
大和柿	福光村辺村々ニ少々御座候		
市兵衛柿	村々百姓等垣根廻りニ少々御座候		
円座柿	村々百姓等垣根廻りニ少々御座候		
御所光琳柿	村々百姓等垣根廻りニ少々御座候		
角市兵衛柿	村々百姓等垣根廻りニ少々御座候		
光琳柿	村々百姓等垣根廻りニ少々御座候		
日本山柿	村々百姓等垣根廻りニ少々御座候		
美濃つるし柿	福光辺りニ御座候		
渋柿	山方村々百姓垣根等ニ御座候		
包ミ柿	山方村々百姓垣根等ニ御座候		
阿ふり柿	山方村々百姓垣根等ニ御座候		
信濃柿	村々之内ニ少々御座候		
たねなし柿	柴野村ニ少々御座候		
猿渡り柿	村々之内ニ至る少々御座候		
さわし柿	頭川村ニ少々御座候		
つるし柿	福光村并右近辺村々ニ而出来仕候		
櫛柿	福光村并右近辺村々ニ而出来仕候		

出典、「砺波郡産物之品々書上申帳」（「三州地理雑誌 六」金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵加越能文庫 16. 60-124-6。「射水郡産物稲名等相調理書上申帳」（「三州地理雑誌 七」金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵加越能文庫 16. 60-124-7。

2 加賀藩領における柿の品種

本章では、加賀藩領の柿の品種について検討するが、その前に全国的な柿の品種には、どのようなものがあつたのか確認しておきたい。千葉氏は『江戸中期農作物諸国産物帳』から、近世において広く生産されていた柿の品種を紹介している。千葉氏によると、生産地域が多い順に、御所柿、木練、妙丹、木酛、八王子、蜂屋、にたり、美濃柿、西条、ひら、信濃（君遷子）、円座、まめかきなどの品種があつた⁽³¹⁾。

また加賀藩のお抱え料理人の船木伝内包早・長左衛門安信父子が、食材の解説書として記した「料理無言抄」⁽³²⁾という書物があるが、7 巻樹木の部の柿の項目に記載された品種を一覧にしたものが表 5 である。この表 5 から、当時の料理人によって把握されていた柿の品種について確認したい。

千葉氏の指摘する品種と共通するものとしては、御所柿、木練、木酛、蜂屋、にたり、西条、信濃、円座などが記載されており、これらが全国的に有名であると同時に、藩主へ提供するに足る品質と判断された品種だったと考えられる。

表 5 「料理無言抄」にあらわれる柿の品種

名前 (カナ)	別名 (カナ)	本名 (カナ)	俗名
大和柿	五所柿	巨勢柿 (コセカキ)	
木煉 (キザワシ・コネリ)		方柿 (ハウシ) 木淡 (キサワシ・コサワシ)	キザワシ
維子柿 (ケイシカキ)	朱柿 (シュシ)		
伽羅柿	透微柿 (スリトヲリ) 一葉柿 (ヒトハカキ)		
カウリン柿	甲州丸柿		
著蓋柿 (チョカツカキ)			
圓座柿 (エンサカキ)			
似柿 (ニタリ)			
ハチヤ柿	光明山 (コウミョウサン) *加州の別名		
田倉柿			
信濃柿		赤棠棣	
筆柿 (フテカキ・ヤマ)		鹿心柿	
西條柿	西條枝柿		

さて加賀藩領全域で生産されていた柿の品種について把握するには、元文3年(1738)に加賀藩が作成した「産物帳」が参考になる。「産物帳」は、加賀藩領内の各郡および町方や寺社方で作成され、さらに国ごとにまとめられている⁽³³⁾。各国の「産物帳」に記されている柿の品種を一覧し、より広い地域で生産されている品種から順に並べたものを表6に示した。史料には、柿の形状についての記載などもあるが、表では味の記載についてのみ掲載した。

表6を見ていくと、まず加賀藩領の柿は、各国郡、町方、寺社方を含むと62品種が存在していたことがわかる。町方・寺社方を除く各国郡の品種数をみると、加賀国では石川郡の28種を筆頭に、能美郡19種、河北郡18種の品種があったことがわかる。また越中国砺波郡も20種、能登国奥郡(鳳至郡・珠洲郡)も17種の品種があった。詳細に見ていくと、加賀国石川郡と能登国奥郡(鳳至郡・珠洲郡)は、その郡でのみ栽培されている品種が多く、石川郡においては平松柿、黒瀬柿、三十苧柿、倉光柿、清水柿、米長柿、吉田柿など地名を冠した独自の品種が各地域で栽培されていたことが伺える。ほか、町方・寺社方でのみ栽培されているものは8品種あった。

つぎに味の記載についてであるが、「味渋し」とあるのは渋柿で、「味よし」とあるのは甘柿、「味渋よし」とあるのは不完全甘柿をさすのではないかとと思われる。しかし「味よし」と記載されている知気寺柿などは、前掲史料1に、「澁柿出来仕候を、包置熟柿に

近世加賀藩領における柿

表 6 「産物帳」にあらわれる加賀藩領内の柿の品種

No.	名称	別名	加賀				能登			越中				味の記載
			河北	石川	能美	他	口郡	奥郡	他	砺波	射水	新川	他	
1	こしよかき	御所柿、大和柿、紅柿	●	●	●	町、小松、寺、松任	●	●		●	●	●	今石動、魚津、高岡、寺、社	味よし、味至而よし
2	はちわうじ	八稜柿	●	●	●	町、松任、小松、宮腰、寺	●	●		●	●	●	今石動、魚津	味よし、味よし、味しふく味よし
3	さふり	さふり柿、にたり	●	●	●	宮腰、町		●		●	●	●	魚津、寺	味よし
4	たかたろう柿	たけたら柿、なかたろ柿、たかなろ	●	●	●		●	●		●	●	●		味よし、しふかき、味しふく
5	こねり	塔柿、こねり柿	●		●	小松	●	●		●	●	●	境、今石動、寺、社	味よし
6	ゑんざ柿	著蓋柿	●		●	町	●	●	所口、寺、社	●	●		今石動	味悪し、味中位、味よし
7	しなの柿	君遷子	●	●	●	寺、町				●	●	●		味よし、しふし
8	あぶり柿	あぶりかき	●	●			●	●		●				しふかき、味しふく
9	つるし柿	白柿、島柿	●		●		●	●		●		●		しぶし、しふかき、味しふく
10	市兵衛柿	牛心柿	●	●	●	町、小松、宮腰、社、寺、本吉渡、松任	●	●						味よし
11	小市兵衛柿		●	●						●	●	●	今石動、魚津	味よし
12	こうりん	黄柿、かうりん	●	●	●	町、寺社、松任				●			今石動	味よし、味中位
13	しふかき	穉柿、小しふ柿		●	●	小松・宮腰・寺、社、町			所口、寺、社	●	●		今石動、魚津、高岡、寺、社	味しふく
14	小柿		●				●	●						味よし、熟しあまし、味しふく
15	十わうじ		●	●	●	町								味よし、味よし
16	ちけいじ柿	知気寺柿	●	●	●	松任								あまし、味よし
17	はちや柿			●		松任				●				味しぶし、しふかき
18	大市兵衛柿			●						●				味よし
19	一葉柿			●		宮腰、松任				●				味悪し
20	れんげかき				●							●		味よし
21	てんもく				●							●		味少し
22	保古柿		●	●										味よし
23	ろう柿			●	●									味悪し
24	はねた柿			●	●									しぶし
25	めうたん柿					松任	●	●						味しふく
26	ときん柿		●											
27	大洪柿		●											味よし
28	さいじやう柿			●		松任								味よし
29	平松柿			●		松任								味よし
30	銭持柿			●		町								
31	黒瀬柿			●		町、松任								味よし
32	三十苺柿			●										
33	倉光柿			●		松任								
34	清水柿			●		松任								味少し
35	米長柿			●		松任								しぶし
36	明りん柿			●		町、松任								しぶし
37	吉田柿			●		松任								
38	めうこ			●										味悪し
39	きびかき			●		松任								味よし
40	ゑんざ柿							●						味しふく
41	しほたりかき							●						味しふく
42	すつらかき							●						味しふく
43	たねなし柿							●						味しふく
44	みつ柿							●						味しふく
45	いかたま柿							●						味しふく
46	日本山柿	につぼんざんかき				町				●				しふかき
47	赤うし柿	あかうるしかき				松任				●				しふかき
48	なつめ柿	ざるすべり柿、ざるわかし、さろん、猿蓑				侍				●			境、今石動、寺社	味よし、しふかき
49	御所かうりん									●				味よし
50	大聖寺柿									●				しふかき
51	国泰寺柿	但、こねり									●			
52	あちま（さ？）柿	しもふり									●			しふかき
53	ひら柿										●			しふかき
54	わきのやま柿											●		味しふし
55	からと柿					松任								しぶし
56	さとう柿					町								
57	うすずみ柿					町、松任								味よし
58	ふしまた市兵衛柿					町								
59	ミノかうりん					町								
60	きさへし					小松、町								
61	おたしま	おしま柿											社、寺	味よし
62	なか柿												魚津	
品種数			18	28	19		10	17		20	12	12		

仕候」とあり、この記載から厳密に判別することは難しい。また全体の傾向としては、渋柿の品種が多いことが見て取れる。甘柿では御所柿（大和柿）が「味至而よし」とされており、甘柿のなかでも最上級の評価だったことがわかる。

さて前述した全国的な品種は、加賀藩領においても、御所柿（大和柿）と八王子は、加越能3ヶ国すべてで栽培されているほか、町方でも広く植えられていたことが判明する。とくに御所柿（大和柿）は、甘柿としての味の評価が高かったことが原因であろう。ほか表6からは、にたり、木練、円座、信濃も大部分の郡で、広く栽培されていることがわかる。ほか2ヶ国に渡って栽培されている品種として市兵衛柿、小市兵衛柿、こうりん（光琳）、しふかき、小柿、はちや柿（蜂屋）、大市兵衛柿、一葉柿、れんけかき、てんもくがある。

市兵衛柿は、表6を確認すると、市兵衛柿、小市兵衛柿、大市兵衛柿、ふしまた市兵衛柿の4種類がある。市兵衛柿の欄には、中国の牛心柿であると記されている。「料理無言抄」(34)には、「イチベ柿 大小アリ 藤又イチベ 大ニ美汁多ク甚味良」とあり、この「イチベ柿」は市兵衛柿のことだと思われる。市兵衛柿には大小の2種類があり、藤又イチベは美味な汁が多く、味も非常に良いと評価されている。ほか「加州ニイチベ柿ト云、他方末無之カ亦イチベノ名加州ニ限テ方言歟 西国ニテ伽羅柿ト云物是也」とある。市兵衛柿は、他所にない柿か、西国（九州）の甘柿である伽羅柿の加賀国の方言ではないかとい考えられていた。伽羅柿については、「肉中沈香ノ如ク味甚良シ、形チ二種有之、加州ニテ之伽羅柿ハ其形大和ガキノ如シ（後略）」とある。果肉は沈香のようで味は非常に良い。形は2種類あり、加賀国の伽羅柿はその形が大和柿のようであると評されている。また一葉柿は、伽羅柿の別名であることも記されている。

現在、金沢から松任にかけて栽培される極早生の品種に藤又がある(35)。これが、ふしまた市兵衛柿のことではないかと思われる。なお藤又は『果樹栽培指導方針』では石川県原産とあるが、石川県原産とは断定しにくいとする説もある(36)。

このように加越能3ヶ国にわたり広く生産されている品種は、全国規模の品種と思われるものがほとんどであるが、加賀藩領の方言として別名がつけられていることもあった。

さて、加賀藩領独自の品種と思われるものには、たかたろう柿がある。たかたろう柿については、表2で見たように正徳元年（1711）には、羽咋郡笹波村で2本だけ植えられていた種なし柿である。史料には「此柿しぶがきに而御座候へ共、常之柿と違ひ、過半たね無御座候。不殘たねなしにては無御座候。勿論たねたし柿とは不申候。高たろ柿と唱申候。」(37)とあり、種なしの渋柿であった。貴重な種なし柿であることから、藩領全域に広められたのではなかろうか。

また国を越えないものの、加賀国内全郡で栽培されている品種に、十わうじ（十王子）、知気寺柿があり、加賀国2郡で栽培されているものに保古柿、ろう柿、はねた柿があった。知気寺柿は、石川郡知気寺村の特産柿が加賀国全域に広まったものと考えられるし、保古柿も地名由来の品種だと考えられる。

ほか石川郡の独自の品種に、明りん柿がある。これは北安田村で栽培されていた妙林柿のことと思われる。妙林柿については、『加賀志徴』に由来が記されている。その内容を史料5に示す。

【史料3】(38)

妙林柿 行善寺の寺内に其古木ありしかど、今枯木と成りて僅かに寺にあるのみ也。傳言に、日像上人妙林尼の宅に宿られ、明日のたくはへなき住居なれば、せん方なく軒端近なる渋柿を採り、焼こがし是を進めけるに、其風味常ならずと上人いたく賞翫し給ひ、其種の焦げたるを手にすゑ、それ法華經の妙理に感得しなば、此種の焦げたるを地にうめ、再び芽を生じ末榮ゆべし。是妙法流布弘通成就のしるしなるべしとて、彼種を為埋られしに、則ち日を重ねて芽を生じ、年を経て大木と成り、年毎に數多の實連れり。今に妙林柿と世に稱するもの、皆此種なり。故に其柿の種、今に焦げたる如くなりといへり。(中略) 此妙林柿は木ざわしにて、此なる地にて始めて植ゑ、そのさき多く出したるなるべし。

解釈すると、行善寺の寺内に、その古木はある。今は枯れ木となって、わずかに寺にあるのみである。伝話としては、日像上人が妙林尼の屋敷に宿泊されたが、明日の蓄えもない住居なので、しかたなく軒ばたの渋柿を採取し、焼き焦がして(渋を抜いて)提供した。その風味は普通ではないと上人はとてもほめたたえ、柿の焦げた種を手にして法華經の道理に感得し、焦げた種を地面に埋め、再び芽を出し、いつまでも栄えたならば、妙法の流布が成就するしるしであるといつて、この種を植えたところ、芽を出し年を経て大木となり、毎年多くの実が連なるようになった。今、妙林柿と世に呼ばれるものは、みなこの種である。よつて、妙林柿の種は、今でも焦げたようであるという。この妙林柿は、木ざわしで、この地で初めて植ゑ、のちに多く出回るようになった、という内容である。

このように、柿の品種には寺院の名称に由来するものも多い。ほかには、加賀国能美郡のみで生産されている、めうこがあげられる。めうこは、現在の打木みょうこう干し柿に使用される品種と考えられる。平安から室町時代頃に妙光寺という寺があり、寺の僧侶が柿の栽培と加工法を伝えたことに由来する柿である(39)。

ここまで述べてきたことをまとめると、加賀藩領で栽培されていた柿の品種は、全国的なものから地域独自のものまで多様であつた。領域全体で栽培された品種は全国的な品種がほとんどであつたが、たかたろう柿や知気寺柿など藩領独自の品種も広く栽培されていた。独自の品種には村落名や人名、寺院名を冠した品種が多く、とくに加賀国石川郡で多くの独自品種が栽培されていた。

おわりに

ここまで加賀藩領における柿の栽培と活用の展開過程を概観してきたが、改めて内容をまとめておきたい。

加賀藩前田家3代前田利常の代までは、特産品としての柿栽培は未発達であった。しかし5代前田綱紀の代となった元禄期には、加越能3ヶ国すべての領域で串柿やさわし柿などの渋柿の加工品が特産品として登場するようになる。享保期に至ると柿の栽培地域が拡大したほか、串柿などの加工品だけでなく大和柿などの甘柿の栽培が盛んになり、加賀国石川郡七原村の七原柿などのブランド柿も誕生した。安永期に至っては、越中国砺波郡福光村のように、渋柿を自村だけでなく他村から仕入れ、干し柿への加工を行う村落もあらわれるようになった。結果、福光村の吊るし柿の生産量は、文化8年（1811）の7万個から天保年間（1830～1843）には500万個にまで急増することとなった。

加賀藩領内で栽培されていた柿の品種は、全国的なものから地域独自のものまで非常に幅広く存在した。残念ながら品種ごとの生産量は不明であるが、領域全体で栽培された品種は全国的なものがほとんどであった。そのなかで、藩領独自の品種で広く栽培されていたのが、たかたろう柿や知気寺柿である。また独自の品種には村落名や人名、寺院名を冠した品種が多く、とくに加賀国石川郡で多くの独自品種が栽培されていた。

加賀藩領における柿の栽培と活用については、将軍家への献上品であった尾張藩などに比べて史料も少なく、明らかにできたことは多くはない。柿の流通や消費の側面の検討などは今後の課題である。

[注]

- (1) 今井敬潤「柿-甘みの確保-」（『日本の食文化 6 菓子と果物』吉川弘文館、2019年）、同『ものと人間の文化史 185 柿』（法政大学出版局、2021年）。
- (2) 志賀町の干し柿用の品種は、昭和9年（1934）ごろまではタカタロー、ナガタロー、ヨシカワヅルシ、日本、モンベ、西条などが栽培されてきた。そのなかから西条を原種とした品種改良の結果、「最勝」の改良に成功したものが最勝柿である（北陸農政局統計情報部編『北陸の特産物』農林統計協会北陸協議会、1978年、133ページ）。明治40年から大正5年までの10年間で、商品生産物としての乾柿が生産された（『志賀町史 第5巻沿革編』石川県羽咋郡志賀町役場、1980年、608～609ページ）。
- (3) 仏師ヶ野柿は、白山市の仏師ヶ野町、河原山町で生産される渋柿である。起源は不明であるが、昭和40年度には230箱（1箱10kg入）ほどの柿が出荷されていた（『石川県鳥越村史』鳥越村役場、1972年、592～593ページ）。
- (4) 紋平柿は、河北郡元女村のモンベさんの家で採れた柿を樽柿にし、加賀藩主に献上したことに由来すると伝えられているが、産地化の運動は昭和55年（1980）のことである（『たかまつの礎 高松町史』高松町、2004年、102・104ページ）。ただ年代は不詳であ

るが、近世期に記された「村高免家数人数等巨細帳」には、「菓類等振売人」が 22 人いたと記されており、近世期においても柿の加工品を販売する者が多くいたと推測される（『石川県高松町史』石川県河北郡高松町、1974 年、1193・1194 ページ）。

また近年は、宝達清水町の宝達集落（上野地区）にも「紋平さ」という屋号の農家が住んでおり、その家の柿の木が紋平柿のルーツの可能性があるとこのことで、宝達清水町も紋平柿の特産化に取り組んでいる（宝達清水町農林水産課「『紋平柿』に関する情報について」宝達清水町、<https://www.hodatsushimizu.jp/soshiki/norinsuisanka/4760.html>、参照 2024 年 3 月 14 日）。

- (5) 三社柿は、もともと西勝寺柿とよばれていたが、福光の商人が金沢の三社町の商人に「津るし柿」を販売し、三社町でさらに加工して木箱に詰め、三社柿として販売したことから、いつとはなしに品種名としても三社柿と呼ばれるようになったという（千葉茂『富山干柿』富山県農業水産部、1980 年、15・16 ページ）。
- (6) 大友一雄『日本近世国家の権威と儀礼』（吉川弘文館、1999 年）。また堂上蜂屋柿全般については、秋元浩一『千年の歴史の味、堂上蜂屋柿』（新農林社、2000 年）に詳しい。
- (7) 岡田勉『柿の文化誌-柿物語-』（南信州新聞社出版局、2004 年）、市田柿の由来研究委員会監修『市田柿のふるさと 第 2 改訂版』（長野県下伊那郡高森町、2009 年）。
- (8) 前述註(5)千葉『富山干柿』。
- (9) 小竹礪『とやま果樹史稿』（新誠堂、1983 年）。
- (10) 『福光町史 上巻』（福光町、1971 年）。
- (11) 前掲註(5)千葉『富山干柿』6・7 ページ。
- (12) 森田平次著・日置謙校訂『金澤古蹟志(中)』（歴史図書社、1976 年）8 ページ。
- (13) 前掲註(12)『金澤古蹟志(中)』9・10 ページ。
- (14) 「微妙公御夜話 異本 上巻」（『御夜話集 上編』石川県図書館協会、1933 年、217・8 ページ）。また、ほぼ同内容の記事が「拾纂名言記 上巻」（『御夜話集 上編』280 ページ）にも掲載されている）。
- (15) 「日暦 六」（金沢市立玉川図書館所蔵、加越能文庫 16. 63-76-6）。
- (16) ここでの 1 連とは、1 串に柿を 10 個ずつ刺したものを 10 串用意し、縄で編んだものをさしている（「旧記 廿」（富山大学中央図書館所蔵、菊池文書 KKB05810000））。
- (17) 『日本農書全集 5 農業遺書・耕作早指南種稽歌・農業蒙訓・農隙所作村々寄帳』（農山漁村文化協会、1978 年）329 ページ。
- (18) 『石川県鳳至郡誌』（石川県鳳至郡役所、1923 年）937・938 ページ。
- (19) 『輪島市史 資料編第 2 巻 村役人家文書』（輪島市、1972 年）314・315 ページ。
- (20) 前掲註(12)『金澤古蹟志(中)』13・14 ページ。
- (21) 高柳真三・石井良助編『御触書寛保集成』（岩波書店、1934 年）No. 2931。
- (22) 前掲註(15)「日暦 六」。

- (23) 前掲註(16)「旧記 廿」。
- (24) 『福光町史 上巻』(福光町、1971 年) 792 ページ。
- (25) 青木新八郎と高山藤右衛門の両名は、宝永 7 年(1710) から享保 9 年(1724) の間、御台所奉行であった(『諸頭系譜 上』419・420 ページ)。
- (26) 「御進物御用ニ可相立物所々承合、今般書上候品々覚」(『金沢市図書館叢書(七) 温故収録 四』金沢市立玉川図書館近世史料館、2009 年、322～325 ページ)。
- (27) 「羽咋鹿島両郡産物書上帳」(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵、加越能文庫 16. 70-15)。
- (28) 恩田鐵彌・村松春太郎『改訂増補実験柿栗栽培法』(博文館、1934 年) 54・55 ページ)。
- (29) 『福光町史 上巻』(福光町、1971 年) 792～797 ページ。
- (30) 安政 3 年(1856) 12 月「福光村諸商売出来年号等相調理書上」(『福光町史 下巻』福光町、1971 年、13 ページ) には、「干物果物 吉崎屋文左エ門」の名前が見える。
- (31) 前掲註(1) 今井『ものと人間の文化史 185 柿』60 ページ。
- (32) 「料理無言抄」[2](国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/2557695>、参照 2024 年 3 月 14 日)。
- (33) 「郡方産物帳」(金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫 16. 70-008-1～9)、「加州産物帳」(同 16. 70-016)、「越州産物帳」(同 16. 70-017)、「能州産物帳」(同 16. 70-018)。残念ながら、町方や寺社方の「産物帳」は残されていない。
- (34) 前掲註(32)「料理無言抄」[2]。
- (35) 『果樹栽培指導方針』(石川県農業情報センター、1995 年) 82 ページ。
- (36) 『石川県農村文化関係史料第 3 集 石川の農林産物とむら-園芸・林業編』(石川県教育委員会、1985 年) 108 ページ。
- (37) 前掲註(12)『金澤古蹟志(中)』13・14 ページ。
- (38) 森田平次著・日置謙校訂『加賀志徴 下編』(石川県図書館協会、1937 年) 32 ページ。
- (39) 石川県農林水産部ブランド戦略課「いしかわの生産者出荷情報カタログ 打木みょうこう 干し柿の会」(石川県、<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/nousei/brand/tisantisyau/documents/b-17.pdf> 参照 2024 年 3 月 14 日)。